

2019年度 学校法人親愛学園 親愛幼稚園 学校評価 報告書

2019年12月23日

親愛幼稚園 園長 井田 泉

はじめに

文部科学省による「幼稚園における学校評価ガイドライン [平成23年改訂]」の「はじめに」には次のように記されている。

「本ガイドラインは、各幼稚園や設置者における学校評価の取組の参考に資するよう、その目安となる事項を示すものである。したがって、各幼稚園等が行う学校評価が必ずこれに沿って実施されなければならないことを示す性質のものではない。各幼稚園や設置者は、その創意工夫により進めてきた学校評価の取組の中に、本ガイドラインに示された内容を適宜取り込むことにより、園長のリーダーシップの下、全教職員が参加しつつ、学校評価の一層の充実・改善に引き続き尽力されることを期待したい。」

以上にもとづき、この学校評価報告書はガイドラインの内容を尊重しつつ、本園の現実と今後に向けて有効適切と考えられる方法によって重要と思われるところを中心にまとめたものである。そのため例えば「ガイドライン」に含まれる「自己評価結果公表シート例」にそのまま即する形をとっていない場合がある。

I 自己評価

2019年8月、現状把握と職員の資質向上を目的に、「親愛幼稚園職員自己評価表」により職員の自己評価を求めた。この評価表は他園の例を参考に本園独自に作成したもので、質問項目の中にはどの園にも共通するもののほか、当園の創立精神に関わるものを含めている。次のような六つの大きな柱を掲げ、計32項目について各自の達成度についてA～Cの段階評価を求めた。また自由記載欄を設けて、各自の振り返りを園全体の今後に生かせるようにした。

- I 保育者としての姿勢・向上
- II 保育のあり方・子どもとの関わり
- III 職員相互の関わり・園全体
- IV 保護者との関わり
- V 環境
- VI その他

さらにこの1年、次のことを重点目標とし、これについての振り返りを求めた。

- (1) 本園の創立基盤であるキリスト教精神について理解を深め、それを保育現場に生かし、また保護者の理解・協力を得るよう努めること。
- (2) 本園の恵まれた環境をより具体的に生かす工夫をすること。
- (3) 危機管理・安全対策を進めること。

自己評価から主なもののみをまとめると次のようになる。

- ① 毎年単に同じことの繰り返しをするのではなく、新鮮な気持ちで新しく工夫し、園児の関心や意欲を高めるように取り組んだ。
- ② 各園児の状態、子どもどうしの関係、クラスの状態などについて注意深く把握し、職員間での意見交換、職員会での報告などをおして、ふさわしい関わり、援助に努めた。また保護者とのコミュニケーションを密にとるようにし、必要に応じて子ども発達センターなど外部との相談・協力を大切にしてきた。
- ③ 見学への臨機の対応、ホームページのリニューアル・更新につとめ、園の実際がより広く知られるように努めた。
- ④ 上記のⅠ（１）＜キリスト教精神＞については、年数回の職員園内研修、月１回の職員会、日ごとの振り返り・打合せをおして深める努力をしてきた。また保護者に対しては、毎月発行する「しんあいだより」、月１回の親子礼拝、「マリア会」（園長主催による保護者対象の自由な集まり）、また「しんあいの会」（PTAにあたるもの）役員会などの機会をおして、共通理解を深める努力をしてきた。
- ⑤ 上記（２）＜環境の活用＞については、ことに近畿地区私立幼稚園研修大会において具体的な取り組みを発表する機会があり（テーマ「豊かな感性と表現を育む保育～地域や自然との関わりの中で～」 2019年7月26日）、好評を得て、職員の自信と意欲の高まりにつながった。
- ⑥ 上記（３）＜安全対策＞については、従来からの懸案であった正門の完全施錠について、設立母体である奈良基督教会の理解・協力を得て2018年2学期から実施した。またこれまでの個別の対応マニュアルを総合的に見直し、「園児の安全のための危機管理マニュアル」を作成し、職員に周知するようにした。

以上から全体を４段階（A 十分達成されている、B 達成されている、C 取り組まれているが、成果が十分でない、D 取組が不十分である）によって評価すれば次のような結果となる。

A	目標に向かっての取り組みが熱心になされ、それが実現されてきたと評価できる。 各職員は各項目について必ずしも自己評価として「A」を付けているわけではないが、これはそれぞれの反省を今後に生かそうとする誠実かつ積極的な姿勢の現れであると理解できる。
---	--

Ⅱ 学校関係者評価

従来の枠をさらに広げ、在園児保護者、卒園児保護者、地域住民、学園関係者（理事・監事・評議員）、また幼稚園の母体でありかつ交流の深い奈良基督教会関係者に評価委員を委嘱して「学校関係者評価委員会」を構成し、２度の会合を開いた。その際、職員の自己評価のまとめとともに園の目標や実際について説明し、それをもとに対話を重ねることをおして理解を深めていただき、かつ有益な意見をいただいた。会合に欠席された方々とは別の機会に懇談の機

会を設けてコミュニケーションを図り、意見をいただいた。またそれぞれに文書での意見・評価をお願いしたところ、多数の方々から回答をいただくことができた。これらは今後の園の改善のための貴重な資料となる。

ここでは「I 自己評価」に挙げた(1)～(3)の目標に留意しつつ、しかしそれに限定せず、園として受け止めたい主な評価をまとめることとする。

<当園の良いと思われるところ>

1. 子どもたちが豊かな自然に触れながらのびのびと遊ぶことができる。本来子どもたちが幼児期に体験すべき遊びの環境が整っており、これを十分に活用して保育がなされている。この具体例が「近畿地区私立幼稚園研修大会」での発表報告によく示されている。
2. 子どもたちへの目が行き届き、愛情深くこまやかで丁寧な保育がなされている。保護者として安心して子どもを預けることができる。
3. 「キリスト教保育」に対する保護者の関心や協力は深まっており、それは親子礼拝やクリスマス等の大きな行事に顕著に見られる。園長主催の「マリア会」の意味も大きい。重要文化財にも指定されている美しい木造の礼拝堂とそこで共に過ごす礼拝等の時間は、園児と共に保護者の大切な時間になっている。
4. 子どもひとりひとりに寄り添った保育がなされている。先生がたが温かく、同時に新しい挑戦へと子どもたちを励ましてくださるので、子どもたちが深いところから養われているのを感じる。これがキリスト教精神に基づいた教育というものだと思う。祈る心、感謝する気持ち、人への思いやりの心が培われている。
5. あらかじめ園が定めた保育カリキュラムをこなす、というだけではなく、子どもたちの反応を取り入れて新しい工夫をするなど、柔軟な姿勢が素晴らしい。
6. ぬくもり、手づくりを大切にし、自由遊びを重視し、コーナー保育を早くから取り入れるなど、園児一人ひとりが自分の居場所を見つけ、安心して過ごせるように配慮がなされている。また園児の新しい挑戦へのためらいをある時は待ち、あるときは後押しするなど、しばらく前からその重要性が認識されてきている「非認知能力」の育成が早くからなされている。
7. 発達遅滞等の子どもを受け入れ、補助教員を付けて丁寧に保育をしており、その結果見違えるほどの成長を目の当たりにすることが多い。
8. 園の見学対応が丁寧になされている。また入園説明会&オープンキンダーガーデンなどを年ごとに見直して充実を図っている。またホームページのリニューアル(スマートフォン対応を含む)がなされ、更新も頻繁になされている。また若い層に人気の「インスタグラム」による発信もあり、広報活動が以前に比べて大きく進んでいる。
9. 職員が外部研修に参加するだけでなく、園内研修が年に数回実施され、教育の質の向上に努めている。

10. 先輩職員からの新人職員への助言・指導が適切になされ、新人の成長が顕著であると感じられる。職員には意欲と熱意があり、チームワークを大切にした保育がなされている。
11. 以前から設置されていた警察との直接通報装置について確認と必要な機器の交換がなされて安全・安心が高まった。

<当園の改善課題と思われるところ>

1. 環境のすばらしさ、木製あるいは手作りのおもちゃの価値、さらに高い保育の質を持った幼稚園であることがもっと十分に広く知られるべきである。園からの呼びかけ、発信に工夫が期待されるとともに、幼稚園関係者もさらに協力すべきである。
2. 園が中心に位置づけている「遊び」が、ややもすれば表面的に受け取られてしまう危険がある。このことが人としての学びの源、人生の土台となるものであることのより丁寧な説明、訴えかけがほしい。「親と子が共に育つ幼稚園」としてさらなる深まりを期待したい。
3. 礼拝堂の耐震補強工事については、幼稚園現場の意見や要望を踏まえつつ、園児の安全とともに、園の大切な環境を可能なかぎり保ちつつ進められていると感じる。しかし工事は長期にわたるので、不測の事態が起こるがないように、園と教会、工事関係者が事前に十分な連絡・協議を行い、常に安全対策を講じる必要があると思われる。
4. 北門のオートロック化が以前から課題となっているが、多方面からの検討により早期に適切な結論が出ることを望ましい。
5. 「働くお母さんを応援します」という趣旨から、正規保育時間後の預かり、長期休暇中の預かりの拡充に取り組んできたが、社会のニーズに対応する努力がさらに必要と思われる。
6. 従来「母の会」(PTAにあたるもの)は2019年度から「しんあいの会」と改称された。これは子どもを育てるのは母親だけではないこと、園児の送り迎えや行事への参加に父親や祖父母が参加することが現実が多いことから、必要な決断であったと思う。従来保護者について「お母さん」と呼び習わしてきた面があったことを振り返り、意識して包括的な表現を心がけることが大切と思う。

Ⅲ 第三者評価

本園の第三者評価を学校法人京都聖三一学園聖三一幼稚園園長の松崎美幸先生にお願いした。自己評価、学校関係者評価の結果をお知らせするとともに、直接の対話を行った結果、次のような評価をいただいた。(次頁)

平成 31 年度 親愛幼稚園 第三者評価報告書

2019 年 12 月 20 日

松崎 美幸（聖三一幼稚園園長）

【総評】

受け継がれた伝統を大切に守りつつ、日々の保育の充実に向けて、教職員一同、また保護者・地域の方々と連携し歩む姿がみられる。

【良いと評価できるところ】

- ・当園設立の趣旨や園の方針であるキリスト教保育を大切に受け継ぎ、伝承していく事を大切にしている。礼拝や行事を通して、繰り返し園長からのメッセージ、また教職員の思いとして保護者や地域の方々に伝える事ができている。
- ・積極的に園内外の研修に取り組み「新幼稚園教育要領」に即した保育の実現を目指そうとしている。事に近畿地区私立幼稚園教員研修大会兵庫大会においては「豊かな感性と表現を育む保育～地域や自然との関わりの中で～」というテーマを設定し、実践に基づく研究発表に挑戦した。これにより自園のあり方の振り返りつつ、それを発展させることができた。教職員の中から問題意識が発題され、保育改善に取り組もうとする姿勢が高く評価される。
- ・外部からの講師を招き、保育力の底上げに取り組むことができている。
- ・保育に深く精通している副園長を置くことにより、管理・運営が整理され、充実した組織作りが実現されている。
- ・警察に直結する防犯ブザーの整備・警備会社による定期的な防犯点検・聞き取り調査など、セキュリティ対策の強化に努める事ができた。

【改善課題と思われるところ】

〈施設整備面について〉

- ・セキュリティについて：引き続き、園児・保護者にとっての安全が十分に確保できるセキュリティ対策の検討を期待する。特に、敷地が広大であり管理が行き届きにくい場所に関しての検討を具体化することを望む。
- ・バリアフリー化について：教会・地域との調整が困難であると思われるが、公共施設としての役割を担うために、バリアフリー対策も視野に入れて施設計画の検討を期待する。

〈運営について〉

- ・「働き方改革」「保育無償化」など昨今の保育に対する社会ニーズを検討し『2歳児クラスの整備』『新制度へ移行』などについて、当園がどのように社会に貢献していくことができるかを検討し、同時に安定した運営に繋がる事を期待する。
- ・子ども一人ひとりにとって決して豊かとは言えない日本の現代社会にとって、また、家庭での子育てのハードルが高く保護者に寄り添うことが重大な日々にとって、当園が大切にしてきた揺るぎないキリスト教保育の精神を大切に発信し、広く伝える方法を模索し続ける事を願う。その為の新たな方法（IT化など）の検討を期待する。